【The Black Note】第19話　遺跡の決闘

■オープニング

セレスモノローグ「キレイに、キレイに飾られた虚飾の歴史と、裏切りと嫉妬、憎悪にまみれた真実の歴史。永遠の謎という名の虚飾のベールが次々とはがされて、本当の……、本当の真実がとうとうあたしたちの前に姿を現した。それは後の世にブラックノートと呼ばれる闇の歴史書に記された天使たちの最初で最後の悲しみの物語」

■タイトルコール
デュレ「The Black Note 第19話　遺跡の決闘」

■本編
□シメオン遺跡。
・シリア、マリスのパーミネイトトランスファーで吹っ飛ばされて、一人。
　SE：シリアの足音。

シリア「ここはいったいどこなんだ……？」

　SE：何かが存在する不思議な雰囲気の音。

シリア「ん……？」
シリア「……。まさか……。ふ……？　不死鳥の卵……？」

　SE：足音。

シリア「……まさか、こんなところに……」

　SE：翼の空気の切る音。

迷夢「どこまで飛ばされちゃったのかしらねぇ。……マリスちゃんの言い方からしたら、そんなに遠くへは行ってないと思うんだけどなぁ。シメオンのどこかにいるはずなんだけど、さっぱりだわ」

迷夢「お！　いたいた」（大喜び

迷夢「リボンちゃぁん」
シリア「――？　迷夢か。――どうやってここまで……と言うか――。マリスは……、ぎゃぁ！」

　SE：迷夢、リボンの首を絞めんばかりの勢いで抱きつく。

迷夢「あ～この肌触り、最高よねぇ。……で、リボンちゃん。どうしたって？」
シリア「――お前のロミィが見付かったんだよ。……そこの瓦礫の下にある」
迷夢「ロミィが瓦礫の下ぁあ？　あたしだって散々探して見付けられなかったのに、何でこんなところに？　それにさぁあ？　ここは地下墓地大回廊からはかなり遠いよ」

シリア「……。お前はその地下墓地大回廊からどうやって脱出したんだ？　パーミネイトトランスファーか？　それとも目覚めた時はお空の下か？」
迷夢「う～ん。それがよく覚えていないのよねぇ」
シリア「まぁ、何でもいいが。迷夢をそこから運び出したやつがそいつも運び出した……と思う」
迷夢「そうしたら、そいつがキミが封じ込めたマリスを解放しちゃったのね？　まあ、たぶん、きっと、あたしのウロボロスの腕輪に残ったサスケの魔力だと思うんだけど……」
シリア「……」
迷夢「そんなしけた面はしないのよ。僅かに握った幸運も逃げていっちゃうぞぉ。今更、誰がどうでも関係ないじゃん？　あたしはここに居るし、不死鳥の卵も見付かった。今はそれだけでもよしとしないとね？」
シリア「そうだな。――まぁ、あれだ、迷夢、お前は不死鳥の卵をこっちにもってこれるか？」
迷夢「う～ん？　まぁ、そんなこと、あたしにかかれば楽勝よ。……何よ。ジィッと見詰めたって何も出ないわよ……」
シリア「出してもらわなきゃ困るだろ、卵を。あれがもしマリスの手の上で孵ったらどうする。マリスがあの存在に気付く前に手中に収めてしまわないと……」
迷夢「案外、気が付いてるのかもね。だから、リボンちゃんをここに送り込んだ。……持ってきて欲しいんじゃない？」
シリア「――考えたくはないが、その可能性はあるな……。迷夢ならこの卵、どうする？」
迷夢「あたしなら、持ってく。あれは不確定要素そのものだから、持って行けば何かが起きるよ」
シリア「じゃ、早くしろ」
迷夢「もう、持ってる」
シリア「……ヒトが悪い。ま、いいさ。みんなところまで、こっそり連れ戻してくれ」
迷夢「もちろん、その為に来たのよ」

□久須那対マリス。

マリス「どうした？　そのまま、黙っているつもりか？」
久須那（――やはり、挑発に乗るしかないか……）

　SE：イグニスの弓が放たれる音。
　SE：それをなぎ払う音。

マリス「――甘いな……」
久須那「そうでもないさ」
久須那（間合いを詰める……。もっと近く。間合いをあけたら、危険だ……」
マリス「意外にしぶといな、貴様」
マリス（目覚めよ、光の瞳。その美しき光玉の彼方よりあまたの次元を駆け抜ける……）
マリス「真実の道しるべを我が前に現せっ！　開け！　クラッシュアイズ」

　SE：クラッシュアイズ発動。

久須那「――スプールシールドっ」

久須那（……これ以上は……無理だ……）
久須那「転換、――光の雫よ、弾け飛べ！」

　　SE：キュイイィィィン。

久須那「スプラッシュフォトン！」
マリス「シールドアップッ！」

　　SE：ひゅん、ひゅん。

マリス「甘いぞ、久須那」
久須那「スパークショット」
マリス「わたしに――攻撃をさせないつもりかぁっ！」
久須那「……」
マリス「小賢しい！」
久須那「我が弓よ、剣となれ！」

　　SE：弓を剣に変えて……。

マリス「な……？」
久須那「知らなかったか？」
マリス「いいや、貴様がそんな高度な技を使えるとは思っていなかったのでなっ」

　　SE：剣の音。

マリス「っ！」

　　SE：さく。

マリス「――血。……貴様――。迷夢にさえ許さなかったのだが……」
久須那「眠りすぎて、衰えたんじゃないのか？」
マリス「かもしれない。だが、――失敗したな、久須那。今ので完全に目が覚めた」

□迷夢とシリア。
　・迷夢はシリアをだっこして、空を飛行中。

迷夢「……キミさ。少し、ダイエットした方がいいんじゃない？　マジで重い……」
シリア「これでも、フェンリルとしては軽い方だぜ」
迷夢「ウッソ〜、これでぇ？　ワイン樽二つ分はありそうな重さなのにぃ」
シリア「それは失礼だろ？　お前」
迷夢「あははっ。悪気はないんだから、細かいことは気にしないのよ……と、戻って来れたわね」

　　SE：着地。

迷夢「あ〜あ〜、もう。手際が悪いんだから」
デュレ「ひぃっ！　……迷夢さん……。どこに行っていたんですか？」
迷夢「あぁ、細かいことは気にしなくていいから。セレスはどこ？」
セレス「なぁに？」
迷夢「まだ、こんなところにいた？　そりゃいいけど、キミに預かって欲しいものがあるの」

　　SE：迷夢、ポケットをごそごそ。

迷夢「これよ……。初めはデュレに渡そうと思ってたんだけど、予定変更。セレス、不死鳥の卵は
　　キミが抱いていなさい」
セレス「……あの、……不死鳥の卵って何ですか……？」
迷夢「マジ？」
セレス「あはは……。マジ……」
迷夢「キミ、話を聞いてなかったの？　キミに色々と説教をたれるだけ無駄なんだろうけどねぇ」
デュレ「あの、迷夢さん。セレスにそんな大事なものを預けても大丈夫なんですか？」
迷夢「その点については大して心配はしてない。問題はキミがこの子になんて名前を付けるかなの
　　よ。ロミィ。絶対にロミィ以外の名前は許さないんだからね！」
セレス「いぇ、そんな、名前のことは特にその、ロミィで構いませんけど」

　　SE：ごそごそ。

迷夢「ウェストポーチにでもしまっておきなさい。鬱陶しい」
セレス「でも、ウェストポーチはパンパンで、入らないから……」
デュレ「何、子供みたいなことを言ってるんですか！　ポーチの中身なんか捨てちゃいなさい。ど
　　うせ、大したものは入ってないんでしょ。もし、あったとしても不死鳥の卵、ロミィを入れ
　　るくらいのスペースは作れるでしょう？　孵ったら大変だけど……」
迷夢「ま、ともかく、ロミィは頼んだわよ、セレス。割ったり、マリスに奪われないようにね」

　　SE：迷夢、セレスの肩をたたく。

迷夢「さて、魔法陣制作を急ぐわよ。久須那が頑張ってくれているうちに完成さないと、次のチャ
　　ンスなんてない」

□再び、久須那対マリス

マリス（……これは……もしかして、時間稼ぎか……？）
久須那「何をそんなに気にしている？　私を消すのだろう。他のことはそれからでも十分だ」
マリス「……邪魔だ……。消えろ」
久須那（せめて、魔力を半減させられたら……）
マリス「……いつまでも、邪魔をするなら、……望み通りにこの傷の代償を支払ってもらおう」
久須那「もう、マリスの思い通りにはならないんだ。お前こそ諦めて、ここから立ち去れ」
マリス「――そうか、残念だ……。スパークルスピア！」
久須那「！　シールド」

SE：スピアとシールドほぼ同時に。

マリス「天空に住まう光の意志よ。我が左腕に宿り、全てを滅する破壊のパワーを体現せよ。――光弾！」

SE：光弾！　そして、ミラーシールド

久須那「くっ！　ミラーシールド」
マリス「……なかなかだ。だが、これはどうかな？」

SE：光弾、パワーアップ。

マリス「しぶといな。だが、お終いだ。――光の雫よ、弾け飛べ。スプラッシュフォトン！」
久須那（……まだ、負けられない……）

SE：シールド消滅。

久須那「！　くあっ！」
マリス「ふん……。強情を張るからだ。さて、……問題は残りの連中だ。――何をするのか様子を見るか。いや、何をしでかすか、わからん連中だからな。まとめて消し飛ばすか」

SE：マリス、空を飛ぶ。

マリス「貴様ら、さっきから何をこそこそとやっている」
迷夢「久須那は！」
マリス「久須那？　あぁ、そんなのものいたような気がするな……。他愛もない……。戦場に観覧席はないっ。貴様ら、まとめて地獄に落ちろっ」
迷夢「地獄に落ちるのはキミだけで十分だ」
マリス「ほざけ。光弾！」

SE：光弾、シールド。

迷夢「そうはいくもんか！　スプールシールド！」

SE：激しい衝撃波。

迷夢「くぅうっ！　……デュレ、後は任せた。キミならきっと何とか出来る」
デュレ「そんな、迷夢さん！　人数が足りない」
シリア「……セレスにがんばってもらう。それしかないだろう」
デュレ「でも、あの娘は魔力の制御もろくろく出来ないんです。もしものことがあったら」
シリア「それでも仕方がないだろう。ここでマリスに勝てなければ全員死ぬ」
デュレ「……」
シリア「たまにはセレスを信用したらどうだ？　デュレがあいつは出来ない、出来ないと思い込んでるだけで、実はとんでもなく凄いやつなのかも知れないぞ？」

デュレ「そ、そんなことあり得ません」
シリア「ま、やらせてみようぜ。きっと、出来る」

SE：シリア、走る。

迷夢「解放！　スプールシールド！」

SE：魔法解放。そして、吸収。

マリス「また……、姑息で古い手を使ってきたな……。サクション」
迷夢「――キミって意外に諦めが悪くて、執念深いわよね？」
マリス「貴様も変わらないだろ。そんな姿になってもまだ、わたしに盾突くのだからな？」
迷夢「こんな状態になっても盾突いてるのはキミの方でしょ？　あたしは違う。キミがしつこいから付き合ってあげてるだけ。感謝しなさい、マリス」
マリス「ほざけ。二度と減らず口をたたけなくしてやる」

SE：剣を虚空から取り出して、せめぎ合う。

迷夢「見くびってもらっちゃぁ、困るのよね……。――本気出しな」
マリス「いい啖呵をきりやがる」
迷夢（――このままいくと……勝てないし……、引き分けにも持ち込めない……）
迷夢「……来なさいよ。何を遠慮しているの？」
マリス「遠慮などしていないさ。――遠慮しているのは……貴様だろう？」
迷夢「あらぁ……、自信をなくしたキミには何が残るのかしら？　……いいから、来なさいよッ！」
マリス「ほう――、判った。貴様の望む通りにしてやろう」

SE：ギィイイイン。

迷夢「く、あっ！」
マリス「――まだまだ、青いな。迷夢」
迷夢「そりゃぁね。キミより少し年下だから。おばさまにはかないませんわよ。楽勝で引き離してるのなんて、お肌の張りツヤくらいなものだけかしら？」
マリス「ブレイクショット！」
迷夢「っ！」

SE：キィン。ガガガガ。

迷夢「かあっ！」
マリス「ふん！」
迷夢「喰らえっ！」

SE：剣がせめぎ合う。

SE：迷夢が羽ばたく様な音。

迷夢「きゃあ？」
マリス「……可愛いなりをして、はしたないことをするものだな」
迷夢「何とでも好きに言えばいい。けれど、まだ、終わっちゃぁいないのよ」
マリス「では、終わりにしよう」

SE：剣と剣とが激しくせめぎ合う。

マリス「――貴様ぁ――」
迷夢「大した策もないままにあたしに勝とうなんて百年早いのよ！　開け、クラッシュアイズ！」

SE：クラッシュアイズ。

マリス「開け、クラッシュアイズっ！」
迷夢「スパークショット！」
マリス「子供だましだ。シールドアップ」

SE：シールドアップ。

迷夢「……たったそれだけか。頑張ったのにぁ。けど、終わらない。天空に住まう光の意志よ。我が左腕に宿り、全てを滅する破壊のパワーを体現せよ！　光弾っ！　さあっ！　行っけぇ！」
マリス「ミラーシールド！」
迷夢「ちっ！　――ミラーシールド」

SE：光弾。などなど。

マリス「……バカバカしい」

SE：どかんどかん。

迷夢「わおっ♪　やっぱ、あたしの魔法も捨てたもんじゃないのねぇ！」
マリス「詰まらんぞ。もっと、捻りのきいた技はないのかッ！」
迷夢「……捻りねぇ。捻るのは切り札だけと決めてるのよ。乞う、ご期待♪」
マリス「何が『乞う、ご期待♪』だ。わたしをバカにするのもいい加減にしろ！」
迷夢「あら、あたしは畏敬の念を込めてるのよ。そこんとこ、忘れないで」
マリス「畏敬の念があるなら、大人しくしていて欲しいものだ……」
迷夢「そおかしら？　――スパークルアロー」

SE：スパークルアロー

迷夢「やった？？」
マリス「ぬ？」

迷夢「……ざ・ん・ね・ん……はぁ……」
マリス「終わりだな」
迷夢「終わらないわよ。そう簡単には終われないのよねぇ。さぁ、光の精霊、ウィル・オ・ザ・ウィスプ。あたしの味方をしてちょうだい。バニッシュ……」

SE：迷夢、姿を消す。

マリス「……そこだっ」

SE：剣を振るが……外れる。

マリス「……どこへ消えた……？」
迷夢「――スパーク……」
マリス「！」
迷夢「ショットっ！」

SE：スパークショット

迷夢「ありゃりゃぁ？　折角、いい作戦だと思ったのになぁ。ダメか。キミもなかなかやるよね？　け・れ・ど、――あんな面倒くさいことなんかしなくても良かったのに」
マリス「――時計塔の時は手加減していた訳か、結局」
迷夢「そりゃそうよ。倒せると思わせといて、子猫ちゃんたちから気を逸らせておく必要があったからね。でも、もう、その必要は全然ないでしょ。久須那も伸されちゃったし、キミに太刀打ちできるのはあたしだけ――。あたしがキミを倒す」
マリス「大した自信だな」
迷夢「当たり前。この二百年の間に修行を積んだんだから」
マリス「その姿で……？　持久力には難がありそうだぞ？」
迷夢「それはどうかしら、体力には自信があるのよ、あたし」
マリス「しかし、魔力と体力は直接は関係ない」
迷夢「そうよ。けど、無関係じゃない。だから、キミはあたしには勝てない」
マリス「わたしが貴様に勝てないはずはないっ！」
迷夢「そおかしら。実際にキミはあたしに勝利したことはないじゃない？」
マリス「――勝ちは一回あればいい」
迷夢「そおね、それには賛成よ。でも、勝つのはあ・た・しっ！　忘れないで。いいこと？　あたしは迷夢なのよ。そこんとこ、お忘れなく」
マリス「それは一度も忘れたことはない」
迷夢「あら、そぉお？　マリスは絶対に忘れているわよ。策士・迷夢ってことを」
マリス「策士と言うよりはむしろドジにしておきたいな。貴様は不死鳥の卵をここへ持ってきただろう？」
迷夢「あら、策士でドジだなんてマリスにしちゃぁ、随分と気の利いたことを言うじゃない」
マリス「そんなことはどうでもいい。卵をどこに隠した。わたしによこせ」
迷夢「イヤよ。あれはキミのじゃない。キミにあれを持つ資格はない。キミは不死鳥の卵を持つことの……、不死鳥と接することのホントの意味を理解してない」
マリス「理解ならしている。あれは覇王のみが持つことを許される卵だ。しかも、万里眼と不死鳥

の卵が融合した逸品だぞ？　あれはわたしにこそ相応しい」
迷夢「いいえ、キミには見合わない。あれは――セレスにこそ似合う」
マリス「あの金髪の小娘か……。何故、そう思った？」
迷夢「そんなこと知ってどうするの～？　あれがキミの持ち物だったからってキミご相性がいいとは限らない。玲於那の万里眼も混じっているから殊更よね。強力無比悪夢の不死鳥としてキミの相棒になるはずだったかもしれないそれは万里眼の影響を受けて、未来を見透かす心優しい不死鳥になる。ね？　セレスにピッタリでしょ？」
マリス「ピッタリかどうかは知らんが……面白い意見だ。……だが、それ以上の解説は不要だ」
迷夢「残念だけど、そのようね……」

□エルフの森に男、現る。

ジャンルーク（……この森を訪ねる日がこようとは――）

SE：呼び鈴、りんりん。

クリルカ「いらっしゃいませ。――わぉ、つるつる！」
ジャンルーク「つるつる……。　ジーゼさんはいるかな？」
クリルカ「ジーゼ？　今日はここに居るよ。いっつもなら、森の奥にいるんだけど。おじさん、運がいいね」

SE：足音。

クリルカ「ねぇ、ジーゼ。頭のはげたおじさんがジーゼに会いたいって来てるよ」
ジーゼ「……そのはげ頭。もしかして、はげ爺……いえ、あ、そのジャンルーク学園長ですか？」
ジャンルーク「その通りです。お初にお目にかかります。ジーゼさん」
ジーゼ「こちらこそ、初めまして。ジャンルークさん。――こちらへ。クリルカ……」
クリルカ「は～い。おじさん、珈琲がいい、紅茶がいい？」
ジャンルーク「――アールグレイをホットで」
クリルカ「りょ～かいっ！」
ジーゼ「……さて、どのようなご用件ですか？」
ジャンルーク「そうですね……」

SE：カチャカチャ。

ジーゼ「――12の精霊核のことですか？」
ジャンルーク「――そうです。ですが、その前に学園の生徒であるデュレと、セレスが伺っていると思うのですが、どちらに……？」
ジーゼ「……シメオンへ……。天使・マリスと最後の決着をつけに……」
ジャンルーク「天使・マリス……？」
ジーゼ「ええ、12の精霊核伝承に深く関わっている天使の名前です……」
ジャンルーク「伝承に関わる天使の名……。歴史に書き残されていた12の精霊核の伝承は……」
ジーゼ「真実の一部を伝えているに過ぎません。あれには封じられた“残り半分の伝説”が存在してるのです。知らない方が良かったのかもしれませんが……」
ジャンルーク「――詳細を教えていただけますかな……？」
ジーゼ「……ええ。でも、今は手短に――。詳細は全ての決着がついてからお話しします。それにきっと、わたしよりもこの伝承に詳しくなった娘たちがいますから……、二人に聞いてください」

・時間の経過。

ジャンルーク「つまり、伝説は今もな終わっていないと……？」
ジーゼ「ええ……。それどころか――伝説の決着は……これからです」

□再び、マリス対迷夢。

迷夢「へへっ。もう、いい加減にして欲しいものよねぇ。耳にたこかもしれないけどさぁあ？　キミ、しつこすぎるのよ。そろそろやめないと本式に嫌われちゃうわよ？」
マリス「――誰にだ？」
迷夢「あたしによ」
マリス「なら、別に構わん」
迷夢「あら、そぉお？　じゃ、嫌っちゃおう！　マリスなんか、大嫌いっ！」

SE：剣を振る音。

マリス「くっ！」
迷夢「パーミネイトトランスファー！」

SE：魔法発動。しばしの沈黙。

マリス「……？　迷夢が逃げるとは考えられないが……」

SE：とん。

マリス「後ろか！」
迷夢「そーね、あたしは逃げない。てかさ、逃げたとしても執念深いキミのことだから、地の果てにでも追ってくるでしょう？　キミに残された唯一の楽しみはやっつけることだけなんだから。だから、も～しばらく、遊んであげる。感謝しなさい」
マリス「遊ぶ必要はない。貴様と遊ぶのはもう飽きた。どうしてもというなら、相手を変えろ」
迷夢「それは……あたしを倒してから言うことね。（深呼吸）さぁて……。いっちょかましてあげましょうか？」
マリス「貴様……、何かをしたのか？」
迷夢「へへっ、タイムアウト。けれど、こんな程度でどうにかされちゃうキミじゃないよね？　あたしがいいって言うまで動くんじゃないのよ」
マリス「そんなバカなことをきけるか！　貴様も巻き添えだぞ」
迷夢「あら、大丈夫よ。あたしは“光に住まう闇の言霊”使いなんだから、魔法の興味をキミだけに

引き付けるなんて雑作もない♪」
マリス「……」
迷夢「さあ、受けなさいよ。あたしの光の芸術を！　キャリーアウトっ！」

SE：何かが瞬く音。そして、迷夢、マリスに抱きつく音。

＊

□デュレと仲間たち。

デュレ「――後は任せたと言われても……」
デュレ（……やるしかない……）

SE：近づく足音。

ジャンルーク「相当、困っているようだね？」
デュレ「が、学園長！　どうしてここに？」
ジャンルーク「忘れたのかね？　シリアといっしょに仕掛けたのはわしだよ。それにまずは目先の問題をどうにかしなければならないな」
デュレ「目先の問題……？」
ジャンルーク「黒い翼の災厄を呼ぶ天使、マリスを天使の世界に追い返すこと……。君はレルシア枢機卿からメッセージを受け取ったのじゃろう？　――そして、君たちはここまで来た。デュレとセレスを選んだのは間違いなかったようだね」

SE：駆け足。

シルト「――デュレ……、ワタシ、怖い」
デュレ「――大丈夫。怖いことなんてないから……。わたしが付いています」
シルト「デュレが付いてる？」
デュレ「ええ。わたしが付いています」
ジャンルーク「や、闇の精霊・シェイド……」
デュレ「……万一、何か怖いことがあっても、わたしが退治しますから」」
シルト「うん！　じゃあ、ワタシ、戻る！」

SE：再び、駆け足。

デュレ「――学園長、――天使の帰還魔法を発動させても……いいのでしょうか？」
ジャンルーク「下準備は完璧に出来ているのかな？」
デュレ「ええ、多分。迷夢さんの指示に従って、魔法陣を完成させました。――微調整がなかなか上手くいかないんです。一応、魔法が暴発しない程度には出来てると思うんですけど……？」
ジャンルーク「ふむ……。マリスのような魔力の大きな天使を帰すには不十分だろう。完璧に魔法陣を形成しておかなければ、マリスの魔力によって魔法のフィールドが崩壊してしまう危険性が大きい。……迷夢とやらは何か言っていかなかったか……？」
デュレ「久須那さんがマリスに倒されてしまって、迷夢さんが時間稼ぎを……」

ジャンルーク「……正直に言おう。デュレ、君ではこの状況下でこの魔法を行使するスキルが足りない。……恐らく、この魔法を行使する実力を有するのはその迷夢と久須那くらいだろうな。――そして、魔法陣の不具合よりも致命的なことが一つある……」
デュレ「……致命的？」
ジャンルーク「魔力が足りない。このメンバーでは不可能だ」
デュレ「でも、足りるはずだって……。そうだ……、迷夢さんがいない……」
ジャンルーク「――では、何とかして、迷夢に戻ってきてもらはねば……」
デュレ「……でも、それだけではきっとダメです。魔法陣が揺らぐのを感じるんです……」
ジャンルーク「――判っておる。恐らく……、この感じはセレスじゃろう。こういうこともあるだろうと考えてな、実は一つ手段を講じておいた……」

SE：きらり。

デュレ「それは……」
ジャンルーク「ジーゼの精霊核の欠けらだよ。これがあれば、魔法陣を安定させ易いだろうとね？」
デュレ「ジーゼが……」
ジャンルーク「これをセレスに持たせたら、きっと上手くいく」

SE：ジャンルーク、走り去る。

□マリス対迷夢。

マリス「くそっ！　……あれは……何だ……？」
迷夢「あら？　魔法を間違えちゃったかしら？　――光に住まう闇の言霊の本領を発揮してもらったのよ。“境界強化”魔法の比じゃないわよ。あたしの古代魔法をベースにした創作魔法はすっごいの！　きっと、満足してくれるは・ず……」
マリス「離せ！　迷夢！」

SE：じたばた。

迷夢「ホラ……、ジタバタしないの。中途半端になると……痛いわよ。だから、ひと思いに――」
マリス「貴様……本気で死ぬ気か？」
迷夢「さぁあ？　けど、こうする以上、抜け道は必ず用意しておくものよ」

SE：なんか。＋シールド。

マリス「くっ！　シールドディフェンスっ！」
迷夢（……これが上手くいかなかったら……）
迷夢「あ～あぁ。マリスの勝ちね……。やっぱ、前口上が長すぎたかしら？　もっと簡潔にして、あれが早く起動できたらなぁ……。……む～。まだ、こいつには問題が山積かぁ……。破壊力もないし……」
マリス「ダメかっ！」

SE：ぱーん。

マリス「……？　……？　何・だ？」
迷夢「あ〜、やっぱり、“流石”と言うべきかしらね？」
マリス「ふ、ふざけるのもいい加減にしておけ」
迷夢「あら？　あたしはいつだって本気よ。そうでないと、キミとは渡りあえない」
マリス「――貴様らは地上でちまちまと何をやっている……？」
迷夢「どうしても、教えて欲しい？」
マリス「フン――。大して興味もないが、訊いておいてやろう」
迷夢「可愛くないのねぇ。ホントは知りたくてたまらないく・せ・に♪　――いいわ、教えてあげる。あれは帰還魔法。キミを天使の世界に送り返してあげるわ」
マリス「帰還魔法だと？　貴様ら、その魔法はどこで手に入れた」
迷夢「ついさっき、すぐそこで」
マリス「久須那か。それとも、レルシアが遺したかな？」
迷夢「どっちでも関係ないでしょ。どうせキミは送り返されるんだから。さあ、やりましょうよ」
マリス「どうしても……か？　黒き翼の天使でありながら、何故、刃向かう？」
迷夢「刃向かってるのはキミでしょう？　あたしは全体の利になることしかやらないけど、キミは違う。キミは秩序を乱す」
マリス「貴様だろう？　貴様がわたしの作ろうとする秩序を破壊する！　貴様こそ、邪悪だ。貴様は自分の利益になることしか実行していない。偶然だ。貴様のすることが“全体の利”になるのは偶然に過ぎない！　詭弁だぞ」
迷夢「マリスちゃんにそんなことを言われる筋合いはないな。……運も実力のうちなのよ。――お前は天使の世界に帰れっ！」
マリス「今更、おめおめと引き下がれるか！　こんな事で終わると思っているのか！」
迷夢「終わらなくても終わらせるしかないのよ。キミは邪魔なの。私怨を抱えたキミはここにいてはならない。狂ってしまった天使の力はあまりに危険すぎる。判るでしょ？　そのことは。……だから、天使の世界に帰らないなら、ここで大人しく殺されな」
マリス「――馬脚を現したな……？　貴様こそ、私怨におかされている。あの日、貴様を妨げたわたしが憎いのだろう――？　わたしがこのリテールに危険すぎるという理由だけで、貴様がここまで固執するとは思えない。……そう言うことなんだろう？」
迷夢「フフ……。いい勘してるわね、マリス。……そうね、否定はしない。――キミはあたしから大切なものを奪っていった。言わずとも判るでしょ？」
マリス「……奪った……だと？　奪ったのは貴様だろう！」
迷夢「――キミ……、やっぱり、レイヴンのことが好きだったんだ」
マリス「だ、誰がそんなことを」
迷夢「ま、どっちゃでもいいけどさ。けど、あたしの恨みはキミのよりずっと深い。――あたしのリボンちゃんの仇を取らせてもらうわよ。そして、ゼフィの仇も……」
マリス「仇討ちにしては随分と悠長だな。それに……あの辺で――。白いのがもちゃもちゃ動いているだろう。あれはお前の言う“リボンちゃん”ではないのか？」
迷夢「そうね、そうとも言えるけど、きっと、キミには理解できない」

□セレスとジャンルークと。
・帰還魔法の魔法陣を作っている場所で。

シリア「来たんだな、……ジャンルーク」
セレス「はげ！　じじい……。イヤ、あははっ、あたし、帰ります。じゃ、さよな……」
ジャンルーク「何を言っとるか。……それよりも、今はこれを……」

SE：ジャンルーク、セレスにかけらを握らせる。

セレス「何？　これ？」
ジャンルーク「セレスが知らない訳はないだろう……？　君も持っていた」
セレス「水色の欠けら、緑色の欠けら。もしかして、――これはジーゼの精霊核の欠けら？」
ジャンルーク「そうだ……。もしものためにジーゼが貸してくれた――」
セレス「あ……」
ジャンルーク「……欠けらの威力は絶大じゃな……。魔力的にはほぼ安定したようだ……」
シリア「浮かない様子だ。――魔力が足りないんだな。この埋め合わせが出来るのは……オレか、迷夢。――熟練度から考えると迷夢を連れてきて、事にあたってもらうのが最善の策だ」
ジャンルーク「――わしが彼女を連れてこよう。そして、帰還魔法を実行して欲しい」
シリア「いや、オレが行く。オレが行くのが妥当だろう？　マリスと仮にでも渡り合えるのは迷夢の他にはオレしかいない。だろ？　ジャンルーク？」
ジャンルーク「そうだな……。しかし、……君が学園の扉を蹴飛ばした時、よもやこんな事になろうとは考えもしなかった……。やがて、島エルフとダークエルフが学園の門を叩く、その時は……」（シリアに遮られる
シリア「――予想外にとても楽しいことになって、良かっただろ？」
ジャンルーク「……。お陰で職を追われそうになっとるがね？」
シリア「フフ。だが、その道を選んだのはジャンルーク自身だろう。――魔法陣のことはしばらくジャンルークとデュレに任せる。魔法陣自体は安定できたから、帰還魔法発動前のアイドル状態にもっていっても何ら、問題はないだろう。――出来たらの話だが……」
ジャンルーク「そうなると、魔法の引き継ぎをせねばならんな。わしらだけではあの天使を送り返すだけの魔力はない。それどころか、強力な反抗にあえば魔法自体が崩壊してしまうかもしれない」
シリア「……崩壊しても瓦礫の山が砂の山になるだけだ。だが……そんなことはあり得ないだろう？　高次のスキルが要るが、魔法の引き継ぎはお前とデュレなら何とか出来る。――それに迷夢だしな。あいつなら、多少、ふらついても修正してきっちり引き継いでくれるさ」
ジャンルーク「信頼しておるのか？」
シリア「ぜ〜んぜん。……ふふ、信頼するもしないも、あいつならやる、それだけだよ」

SE：シリア、歩き出す。

セレス「リ、リボンちゃん？」
シリア「いい加減、一人で歩けるようになれよ。……オレじゃなくても、アルタがいるさ……」
セレス「待って、リボンちゃん、行かないで」

SE：シリア、走り去る。

セレス「リボンちゃん……」

□かつて、街一番高くそびえていた時計塔の瓦礫の山の上空から成り行きを見守る人影が二つ

ラール「マリスは目的を成就できると思うかい？　ルーン？」
ルーン「あんたは黙ってなさい。――成就してもらっちゃ困るのよ。ここで失敗したら、何もかもがメチャメチャよ」
ラール「何を今更。もう、ボロボロのボロ雑巾みたいなものじゃない？　無理だろうさ」
ルーン「あんたが出来そうなことを言うから気になるのよっ。そんなこと言うなら、黙れ！」
ラール「だってさ、あっちのマリスは思いを成就できたのに、こっちがこれじゃあ、可哀想でね？」
ルーン「その口が言うか？」
ラール「そりゃ、言うよ。1292年と同じにこの時代だって変わらないとは限らないんだから。ま、これ以上、時間線がこんがらかったらたまんないけど、今度はどんな風に切り抜けていくのか気にかかるのが人情ってもんでしょ？」
ルーン「あんたに人情があったなんて初耳。ただの興味本位なんでしょ、バカバカしい。――もう、先行きは見えてるわよ。いくら時の流れが揺るぎないものじゃないとしても、すぐに崩れちゃうほど脆弱でもないってことはあんたも判ってるでしょ」
ラール「そりゃ、もちろん。でも、傍観者としてはよりスリリングな展開を期待しちゃうものなのさ」